

中国語に借用された日本の近代訳語：特に英文法用語について

井田，好治
九州大学教養部：助教授

<https://doi.org/10.15017/6796120>

出版情報：言語科学. 3, pp. 25-40, 1967-03. 九州大学教養部言語研究会
バージョン：
権利関係：



中国語に借用された日本の近代訳語

—— 特に英文法用語について ——

井 田 好 治

さきに私は、19世紀の初頭に始まった西洋文法体系の日本における受容が、蘭・英学者の努力によって、いちおうの消化を終えたのは、明治期以前に属することで、それを訳語の面から見た場合、例えば慶応2年（1866）江戸刊の足立梅景「英吉利文典字類」のようなものに集大成されている、という見解を述べた¹⁾。

これに付随して、こうした文法訳語の成立に、中国系辞書からの補給の有無についても関心をいだき、若干の言及を試みたことがあった²⁾。これまでに私の気づいたところは、文法用語の訳出に関しては、英華辞典系の影響はほとんど見当らず、かえって現行英華辞書が、日本で出来た英文法訳語を、全面的にといいてよい位、採用しているという事実であった。

西洋文法体系の中国語語法研究に対する影響については、那須清助教授から助言をたまわり、「現代汉语外来詞研究」（高名凱、刘正琰共著 文字改革出版社 1958年第1版）をはじめ、有用な参考書を紹介していただいた。それにもかかわらず、身の雑事に追われて、調査の手をのばせずいたところ、たまたま「言語生活」（昭和41年10月号・11月号）に「中国語のなかの日本語」と題する実藤恵秀教授の論攻が載った。このことを床並繁教授によって知らされ、この方面の有益な知識を与えられたが、ただ、文法訳語の中国語への借用については、触れられている個所は見出されなかった。

私は、この小論の対象を、特に英文法用語の借用について、とするが、前段に、中国語への日本の近代訳語借用の一証左として、私自身調べておいたメモを紹介した上で、論点をその面に移したいと思う。これらのことは、もっと広範囲の資料を手広く調査吟味してから、立論すべき問題であることは、もとよりよく承知しているのであるが、今はその余裕がないので、この拙論は中間報告的な性質のものとお考えねがいたい。

1. さて、古くは Robert Morrison の *Dictionary of the Chinese Language*. Macao, 1815-23 の Part III, Eng. and Chin. の部が、蘭通詞吉雄権之助等によって用いられたとされ³⁾、また、幕末・明治初期には Medhurst の *English and Chinese Dictionary*, in

2 vols. Shanghai, 1847 - 8. や、Lobscheid の *English and Chinese Dictionary, with the Punti and Mandarin Pronunciation*. 4 parts. Hongkong, 1866 - 69. が、蘭・英学者に利用され、日本の近代訳語形成に大いに役立てられたことは、諸先輩の研究で周知の知識となっている⁴⁾。

その反面、日本の学者によって創造された訳語が、かえって中国語のなかに外来語として移入されるという逆な現象が存在した。このことは、維新以来日本がアジアにおける西欧文明輸入の先進国であり、中国が近代化に積極的となる前に、日本はすでに西欧の文化・社会・産業方面の事物・観念を大量に吸収しその訳語をつくりあげていた歴史的事実、および相互の地理的条件、多数の中国知識分子の日本留学などを考えると、当然に予想されることで、たとえ発音は異なっているとしても、日中両国は同じ漢字を用いるのであるから、相互の語彙の借用は容易かつ大量に行なわれる筈だ、と考えられる。

2. これについては「現代漢語外来詞研究」の第五節「日語来源的現代漢語外来詞」が取り扱っており、そのなかに「漢語却大量的吸収日語的詞，加以改造，成為現代漢語詞彙中的外来詞成分」とあって、(1) 純粹の日本語より借用されたもの 91 語 (例：場合，場面，場所，便所，武士道，方針，身分，但書，手続など) (2) 本来漢語であったもので、日本人が西欧語を翻訳するに当って、新しい意味を盛りこんで用いた語。この種の訳語の借用されたもの 67 語 (例：文学，文化，文明，文法，⁵⁾ 物理，演説，封建，法律，意味，自由，会計，經濟，教育，共和，社会，思想など) (3) 日本人の漢字配合による‘意識’ (部分的には‘音訳’) によってできた訳語が借用されたもの 300 語 (例：美学，物質，抽象，動議，演繹，概念，学位，批判，否定，放送，意識，人格，科学，化学，肯定，左翼，対象，哲学など)⁶⁾ 合計 458 語で、3 者の割合は (1) 20 % (2) 15 % (3) 65 % となっており、(2) の‘古い革囊に新しい酒を盛った’訳語よりも、純粹な和製漢語および日本人の創意工夫に成った訳語が大部分を占めていることは興味ある事実である。本書の記述は、中国側から観察した Japanese Loanwords の客観的な資料のひとつとして、利用価値多いものと認められる。

3. 次に紹介する私の調査メモは、日本における宗教・哲学・科学・政治・法制・經濟などの分野の近代的訳語が、いちおう成立したとみなされてよい明治 17 年に出版された「英語節用集」(佐野正道編輯)を軸として、本書中に見出される訳語をメモの中から at random に 60 語抜き出し、(A) 本書の訳語 (B) Lobscheid の訳語 (C) 「最新詳解英華大辞典」の訳語 を対照させたものである。「英華大辞典」とは、鄭易里主編 香港広泰書局印行 1962 年刊で、「現在のところ、英中字典としてこれが一番詳しく、また新しい

語彙もずっと増加している」⁷⁾と評価されているものである。(B) (C) の辞書中の訳語は全部を写したものでなく、関連のある意味領域にとどめてある。語順は「英語節用集」に収めてある配列に従った。

この表は、要するに、「宗教哲学政党及ヒ之レニ関スル術語」(「節用集」の緒言)という限られた範囲ではあるが、A ≡ B の場合は Lobscheid の訳語の影響が濃厚なこと、つまり中国語の日本近代学術語への流入の傾向を示し、A ≡ C の場合は、日本製訳語の中国語への流出傾向を示すべき若干の例を与える、とみなされよう。

4.(A)「英語節用集」1884 年	(B)Lobscheid 1866－69 年	(C)「英華大辞典」1962 年
仏教 Buddhism	釈教，浮図	<u>仏教</u> ， <u>釈教</u>
基督教 Christianity	耶穌教， <u>基督之教</u> ，天主教	<u>基督教</u>
万有神教 Pantheism	以天地為上帝，以万物為上帝	汎神教， <u>万有神教</u> ，多神崇拜
唯物論 Materialism	物信，惟信有物而已	<u>唯物論</u> ， <u>実質主義</u> ， <u>唯物主権</u>
唯心論 Idealism	意想之教，幻教	<u>理想</u> ， <u>理想主義</u> ， <u>観念論</u> ， <u>唯心論</u>
功利学 Utilitarianism	利人之道，以利人為意之道 利用物之道，益人之道	<u>功利主義</u> ， <u>実利主義</u>
信神教 Theism	信有上帝	有神論，一神論
世界形質論 Cosmology	堪輿理論	宇宙哲学，宇宙論，世界論， <u>世界形質論</u>
自然神教 Deism	信有上帝惟不信天啓， 率性之教	<u>自然神教</u>
道義学 Moral Philosophy	五帝之理	道德哲学，倫理学（古） 心理学
社会論 Socialism	公用之理，公用	<u>社会主義</u>
科学 Science	学，智，知，理，知慧，知学	<u>科学</u> ，自然科学，学，学問
哲学 Philosophy	理学	<u>哲学</u> ，形而上学，哲理
政治学 Political Science	Politics 政，政知，治国総 智	<u>政治学</u> ，政治
天文学 Astronomy	<u>天文</u> ，曆法	<u>天文学</u> ，星学
数学 Mathematics	<u>数学</u>	<u>数学</u>

物理学	Natural Philoso- phy	Physics 性学，性理，格物	<u>物理学</u>
論理学	Logic	思之理，理論之学，明理	<u>論理学</u> ， <u>論理学書</u>
植物学	Botany	草木總理，草木之学，博学草木	<u>植物学</u>
動物学	Zoology	生物之知，生物總論	<u>動物学</u>
生理学	Physiology	性学，性功用学，性功用論	<u>生理学</u>
統計学	Statistics	国紀，国志，国学，国知	<u>統計学</u> ， <u>統計</u>
神 学	Theology	上帝之道，上帝之教，上帝之道理	<u>神学</u>
地質学	Geology	地成之理，地理總智	<u>地質学</u> ， <u>地質</u>
地理学	Geography	<u>地理</u> ，地理志	<u>地理学</u> ， <u>地理</u> ， <u>地形</u>
礦物学	Mineralogy	金石之理，金石之学	<u>鉱物学</u>
解剖学	Anatomy	剖屍之法，百体生之理，百体生論	<u>解剖術</u> ， <u>解剖学</u>
倫理学	Ethical Science	Ethics 五常，五常之理，五常之道，修行之道，修德之理	<u>倫理学</u> ， <u>倫理</u> ， <u>修身</u>
人類学	Anthropology	身体性論，身百体論，万人類論	<u>人類学</u>
古物学	Archaeology	古学，論古	<u>考古学</u> ， <u>古物学</u>
語 学	Philology	話学，字語總知	<u>語原学</u> ， <u>文献学</u>
人種学	Ethnology	人類通知，万族通知	<u>人種学</u>
文 学	Literature	文， <u>文学</u> ，文字，字墨	<u>文学</u> ， <u>文芸</u>
宗 教	Religion	教，教門	<u>宗教</u> ， <u>宗派</u> ， <u>宗旨</u> ， <u>一教</u>
演繹法	Deductive Method	Deduction 扣者，除者，割者	<u>扣除</u> ， <u>折扣</u> ， <u>演繹法</u>
帰納法	Inductive Method	Induction 引進者，引入者	<u>帰納法</u> ， <u>帰納推理</u>
福音書	Gospel	<u>福音</u> ， <u>嘉音</u>	<u>福音</u>
三位一体	Trinity	三位一有， <u>三位一体</u>	<u>三位一体</u>
絶 对	Absolute	自主，自然，全， <u>齋全</u>	<u>絶对的</u> ， <u>無欠的</u>
平 等	Equality	均平者， <u>平等</u> ， <u>普肩</u> ， <u>同等</u> ， <u>同等</u> ， <u>平等</u> ， <u>均一</u> ， <u>均等</u>	

同品

独立	Independence	自主者，治己者，自理之事	<u>独立</u> ，自主，自立
新約聖書	New Testament	新遺詔書	<u>新約聖書</u>
旧約聖書	Old Testament	旧遺詔書	<u>旧約聖書</u>
新聞紙	Newspaper	<u>新聞紙</u>	報紙， <u>新聞紙</u>
公 会	Parliament	議士会，民委員會，国大公会	議會，国会
文 明	Civilization	教化者，開化者，礼文者， 通物理者，管物者	<u>文明</u> ，文化，開化，教導
自 由	Liberty	自主， <u>自由</u> ，治己之權，自操 之權，自主之理	<u>自由</u> ，随意，自由權，解放
封建制	Feudal System	Feudalism 食業之事，食邑 之事，食国之事	<u>封建制度</u>
權 利	Right	是…，依上帝之聖旨，公道， 係道理，是公道，属，格外之 <u>權</u> ，異常之 <u>權</u> ， <u>權</u>	正，正当，正義，公理，公 道…， <u>權利</u> ， <u>權</u>
政 府	Government	政，管轄，国政	政治，政体，管理， <u>政府</u> ，内 閣
憲 法	Constitution	国政，国法	<u>憲法</u> ，政体
共和政治	Republic	衆政之邦，衆政之国，公共之 政	<u>共和国</u> ， <u>共和政体</u>
内 閣	Cabinet	<u>内閣</u> ，軍機处，閣老	<u>内閣</u>
寺	Church	礼拜堂，上帝堂，天主堂， 天主聖殿 耶穌 <u>教会</u>	教堂，礼拜堂， <u>教会</u>
大学校	University	翰林院	<u>綜合大学</u> ， <u>大学</u>
銀 行	Bank	<u>銀行</u> ，銀舖，錢舖，銀庄，銀 店	<u>銀行</u>
病 院	Hospital	医館， <u>医院</u> ，医局	<u>医院</u>
博物館	Museum	<u>博物院</u> ，百物院	<u>博物館</u> ，美術館
歷 史	History	<u>史</u> ，史記，史紀，錄，志，誌	<u>歷史</u> ，史学，沿革，史制
百年紀	Century	一 <u>百年</u>	<u>百年</u> ，一世紀

統計学的な意味はほとんどないことを承知の上で、訳語の関連するものをまとめてみると、
 $A=C$ 39 語, $A=B=C$ 12 語, $A \neq B \neq C$ 7 語 $B=C$ 2 語となる。最後の2語は、Church と Hospital の訳語である。

$A \neq B \neq C$ の7語は「功利学, 信神教, 道義学, 社会論, 語学, 公会, 百年紀」。この7語を明治15年刊「増補訂正英和字彙」(柴田・子安共著)で引くと、Parliament に「国会」, Century に「一世紀」の訳語がすでにあるが、それ以外は「節用集」の訳と同じである。

5. 私にとって特に関心のある英文法訳語の借用については、その手続として、まず Morrison にあたるべきであるが、これは未見かつ利用不可能であるから、Medhurst および Lobscheid を調べ、この英文法用語の訳語如何を記すこととする。Lexicography の本質上、これに先行する辞書の業績は、後出のものに集成されるのが常識であるから、結論の方向を示すにはさしつかえあるまいと思われる。

Medhurst は、光緒5年(明治12年)に上海点石齋で縮印されたもので、*English and Chinese Dictionary from W. H. Medhurst and other authors.* と英語ではなっている「華英字典」によったが、これは文法用語については見出し語にはないものが多く(例えば、pron. adj. subst. participle など)、また見出し語にはあっても文法上の適訳が付されておらず(例えば article, case, present, subject など)、文法訳語リストとすることは不可能であった。ただし、n. 実字, 人物地方之名. adv. 形容辞. v. 活字, 生字, 動字. interj. 傷痛声, 嘆息詞. indicative 指出的, 直說的 imperative 一定要的, 吩咐 definite 定. indefinite 不定. などが見出された。「事実をそのまま平明に叙する修辭法」(広辞苑, ただし「直接法」という文字を当てているのは誤り)と説明される「直説法」indicative mood は、1814年のわが「訂正蘭語九品集」(中野柳圃遺著馬場貞由訂)に既に表われている。

Lobscheid の方は、Medhurst にくらべると、文法用語の収載はずっと多く、次のような表にまとめることができる。

Grammar 文法書, 通用書語

Article × (以下文法的訳語の欠けている場合を示す)

{ def. 定名字
indef. 不定名字

Noun 名, 名字

{ prop. 本 名 com. <u>普通名字</u> , 通用名字 abs. ×					
Pronoun	<u>替名字</u>	Gender	類	Case	×
{ pers. 人之替名字 demonstr. × interrog. × rel. 倫替名字		{ masc. 陽類 fem. 陰類 neut. 無陰無陽 com. ×		{ nom. 第一座, 第一變字座 gen. 二座, 屬倫 obj. 受座	
Adjective	勢字	Adverb	勢字		
{ posi. deg. 原形, 原位 comp. deg. 比級 superl. deg. ×					
Verb	活字, <u>動字</u> , 生字	Conjunction	繼字, 連字		
{ v. t. 過向嘅活字 v. i. 無受頭之活字 auxil. 輔活字 part. 中言, 中字 inf. 活字之本位 ger. ×		Preposition	定倫字		
		Interjection	情呼字		
Mood	×	Tense	時		
{ indic. 指實之樣 subj. 若式, 活字若之式 imper. 命式 pot. <u>可能之式</u>		{ pres. 今時 past 過時, 往時 fut. 活字指來時之事 perf. 經往時, 全往時			
Voice	聲				
{ act. × pass. ×					

これを一覧すれば、Lobscheid の訳語は、日本における現行英文法訳語とははなはだしく相違し、また同年代の（1866）「英吉利文典字類」ともことになっている。Medhurst とくらべれば、verb 以外には類似点が少ない。前者の adverb「形容辞」は Lobscheid では「勢字」

で adj. と同じ訳語となっている不統一が見られる。

6. ここに、中国における英文法研究書の比較的初期のもののひとつ、と考えられる「英文挙隅」（曾紀沢著）という書物がある⁸⁾。これは「光緒丁亥冬日」すなわち1887年(明治20年)の冬に出版されたもので、「美国喀爾氏文法第二十一次刊行本」を訳したものとある。

ここにあらわれた訳語を、前掲の Lobscheid の訳語表にならって整理してみると次のようになる。

Grammar	文法, 文法書				
Article	区指字				
{ def.	定区指字				
{ indef.	不定区指字				
Noun	静字				
{ prop.	専用静字				
{ com.	泛用静字				
{ abs.	×				
{ collect.	包挙静字				
Pronoun	代静字	Gender	類	Case	地
{ pers.	称谓代静字	{ masc.	陽類	{ nom.	主施
{ demonstr.	×	{ fem.	陰類	{ poss.	主有
{ interrog.	問訊代静字	{ neut.	非陰非陽類	{ obj.	主受
{ rel.	指顧代静字	{ com.	可陰可陽類		
Adjective	繫静字	Adverb	繫動字		
{ posi. deg.	平等				
{ comp. deg.	加等				
{ superl. deg.	極等				
Verb	動字	Conjunction	承転字		
{ v. t.	貫動字				
{ v. i.	不貫動字				
{ auxil.	輔動字	Preposition	縮合字		
{ part.	繫静動字				
{ inf.	無限動字				

ger. ×		Interjection 発語字	
Mood	状	Tense	時
{	indic. 敷陳状	{	pres. 当時
	subj. 懸擬状		past 曩時
	imper. 提命状		fut. 異時
	pot. 權度状	{	pres. perf. 今成
	inf. 無限状		past perf. 昔成
			fut. perf. 將成
Voice 勢			
{	act. 主作		
	pass. 主受		

「英文挙隅」で *n.* を静字, *adj.* 繫静字, *adv.* を繫動字, としてあるのは, 「蘭語九品集」が *naamwoord* を静詞, *bijvoeglijk naamwoord* を虚静詞, *bijwoord* を形動詞, と訳し「語厄利垂語林大成」が全くそれにならっているものに似ている。国語学会編「国語学辞典」(東京堂刊)によると, 「虚詞」(主体的情意を表す語)に対立して, 客体的概念語を「実詞」というが, この実詞に「静詞」と「動詞」との区別を設けたのは王念孫(1744 - 1832)であるという。虚実という考え方で, 二元的に語の性質を把握するのは, 中国古典学的な考え方と思われる。後述する「馬氏文通」では, *n.* は名字にもどり, 静詞は *adj.* を指し「凡実字以肖事物之形者曰静字」とある。

gender について「類, 陽類, 陰類, 非陰非陽類, 可陰可陽類」と訳したものは, *Lobscheid* と同様であるが, 「蘭語九品集」「英文鑑」(渋川六蔵訳, 写本, 1840 - 1)でも陰・陽であらわしているのであって, 本来の東洋的な分類であろう。

「英文挙隅」の訳語を通観すれば, これまた, 日本の現行のものとは全く異なっていて, 中国古来の漢字の意味にもとづいた訳出法であることが知られよう。

7. 「挙隅」に約10年おくれて, 光緒24年(1898)の序文をもつ馬建忠編「馬氏文通」10巻(商務印書館発行, 第1版は1904年)が出版された。これは, 中国語文法をはじめ西洋文法の体系にのっとって説明しようとしたもので, この点では, わが鶴峯戊申が天保4年(1833)に出した「語学新書」とその著想を同じくしている。

その文法用語を英文法的に整理してみると, やはり「英文挙隅」の場合と同様, 日本の文法用語とはちがっている。「文通」では, 伝統的な虚実の考え方にしがたって, 一切の語を

「実字」（「凡字有事理可解者曰実字」）と、虚字（「無解而以助実字之情態者曰虚字」）とに分け、更に実字を細別して5種すなわち名字、代字、動字、静字、状字に、虚字を細別して4種すなわち介字、連字、助字、嘆字とする。

この「馬氏文通」につづいて、西洋文法に依存する中国語語法研究書として重要視される黎錦熙編「新著国語文法」が1924年に刊行されているが、両書間の文法用語訳語の上には、相当に大きな変化が見られる。この間の時期を歴史的にふりかえれば、1894年～5年にわたる日清戦争が下関条約をもって終結し、その翌年から清国の知識分子が大挙して日本に留学するという状況となった。逐年留学生の数は多くなったが、1905年のごときは8,000名に達したという⁹⁾。これら留学生の手によって、西欧近代文化のいちおうの摂取を終えていた日本の宗教、哲学・政治・法律・経済・地理・歴史・産業・医学・軍事などの多くの文化領域の学術書が、次々と中国語に翻訳出版されるに至った。つまり、西洋の近代文物・制度・技術が手っ取り早く、日本訳からの重訳というコースを取って、中国へ大量に流入して行った。この場合、漢字の意味のわかる中国人に、日本製訳語が非常ないきおいで借用されたことは実藤教授のご指摘の通りである¹⁰⁾。

こうした歴史的背景を考慮に入れて、次の品詞分類表の訳語を対照してみよう。（ ）に英語を参考のため付す。

8. 「馬氏文通」1904年「新著国語文法」1924年

実 字	実体詞
(Noun) 名 字	名 詞
(prop.) 本 名	特有名詞
(com.) 公 名	普通名詞
(abs.) ×	抽象名詞
(Pronoun) 代 字	代 名 詞
(pers.) 指名代字	人称代名詞
(demonstr.) 指示代字	指示代名詞
(interrog.) 詢問代字	疑問代名詞
(rel.) 接続代字	聯接代名詞
	述説詞
(Verb) 動 字	動 詞
(v. t.) 外動字	外動詞

(v. i.)	内動字	内動詞
(auxil.)	同動助動字	助動詞
(copula)	×	同動詞
(impers.)	無属動字	×
(part.)	×	分 詞
(ger.)	×	動名詞

區別詞

(Adjective)	静 字	形 容 詞
(posi. deg.)	平 比	平 比
(comp. deg.)	差 比	差 比
(superl. deg.)	極 比	極 比
(Adverb)	状 字	副 詞
	虚 字	關係詞
(Conjunction)	連 字	連 詞
(Preposition)	介 字	介 詞

情態詞

(Interjection)	歎 字	歎 詞
	助 字	助 詞

「国語文法」が「連詞、介詞、歎詞、助詞」などのような、「馬氏文通」の用語を踏襲して、中国語法に特有な詞類の名称をあらわしている点も少ないとはいえないが、それにも拘らず、「字」から「詞」への目立った変り方をふくめて、名詞（普通名詞 抽象名詞）代名詞（人称代名詞 指示代名詞 疑問代名詞）動詞（助動詞 分詞 動名詞）形容詞 副詞など日本訳語からの借用と認められるものが多いのである。

2. 1937年刊の「綜合英漢大辞典」合訂本 *A Comprehensive English Chinese Dictionary*（主編者 黄士復、江鉄 商務印書館発行）は、見出し語数約11万、成語7万4千、例証6万、1700頁に近い大著であるが、この辞書の編輯大綱のなかに、日中の文化交流を示す興味深い記述が見出される。

「日本斎藤秀三郎所著英和中辞典、雖往往根拠 O. D. 及 C. O. D. , 而其自行搜集材料重新編次之处亦復不少、對於助動詞、前置詞、接續詞、皆有独特之研究; … (中略) … 斎藤氏為日本英文法大家、故其書多取文法上之說明比較、在字典界尤為特色、本書於斎藤中辞典之

長所悉加採納，凡常用之文字比較上述各書之例解，折善而從…」

この引用文のいうところが，「英漢大辞典」の英文法訳語の上に，どの程度に反映しているか，を示すと同時に，現行の英華辞典の文法訳語を列举しておこう。これには前にあげた鄭易里主編「最新詳解英華大辞典」を用いた。

10. 「英漢大辞典」1937 年

Article	冠 詞
{ def.	定 冠 詞
{ indef.	不定冠詞
Gender	性
{ masc.	男 性
{ fem.	女 性
{ neut.	中性，無性
{ com.	通 性
Noun	名詞，実名詞
{ prop.	固有名詞
{ com.	普通名詞
{ abs.	抽象名詞
Pronoun	代 名 詞
{ pers.	人称代名詞
{ demonstr.	指示代名詞
{ interrog.	疑問代名詞
{ rel.	関係代名詞
Adjective	形 容 詞
{ posi.deg.	原 級
{ comp. deg.	比 較 級
{ superl. deg.	最上級，最高級
Verb	動 詞
{ v. t.	他 動 詞
{ v. i.	自 動 詞
{ auxil.	助 動 詞

「英華大辞典」1962 年

冠 詞
定 冠 詞
不定冠詞
性
<u>陽 性</u>
<u>陰 性</u>
中 性
通 性
名詞，実名詞
固有名詞
普通名詞
抽象名詞
代名詞，代詞
人称代名詞
指示代名詞
疑問代名詞
関係代名詞
形 容 詞
原 級
比 較 級
最 上 級
動 詞
<u>及物動詞</u>
<u>不及物動詞</u>
助 動 詞

pres. part.	現在分詞	現在分詞
past part.	過去分詞	過去分詞
ger.	動名詞	動名詞
Adverb	副詞	副詞
Conjunction	接統詞	接統詞
Preposition	前置詞	前置詞
Interjection	感歎詞	感嘆(歎)詞
Case	格	格
nom.	主格	主格
poss.	所有格	所有格
obj.	目的格, 賓格	<u>受格</u>
Mood	法	法
indic.	直說法	直說法
subj.	附屬法	<u>仮設法, 接統法</u>
imper.	命令法	命令法
pot.	可能法	可能法
opt.	祈願法	<u>希求法</u>
inf.	不定法	(不定詞)
Tense	時, 時態, 時体	時, 時態, 時制
pres.	現在	現在(時)
past	過去	過去(時)
fut.	未來	未來(時)
pres. perf.	現在完了	現在完成時(式)
past perf.	過去完了	過去完成(式)
fut. perf.	未來完了	未來完成(式)
Voice	態	語態
act.	能動, 主動, 能動態	<u>自動態</u>
pass.	受動, 被動, 受動態	受動態

11. 左欄の「英漢大辞典」の訳語を, *Saito's Vade Mecum English Japanese Dictionary* (1924年, 日英社刊) で検出した結果, その差異はわずかであった。以下個条書きにしてみ

ると、

- (1) noun について「斎藤」に「実名詞」の訳はなく、noun substantive を「実名詞」、noun adjective を「形容詞」と訳して、ラテン文法の品詞分類法の痕跡をとどめている。
- (2) superl. deg. 「最高級」の訳なし。
- (3) 指示代名詞 → 指摘代名詞。ただし、「指示代名詞」は「和蘭文典字類」（安政3年）「英吉利文典字類」以来の日本の訳語。斎藤は、明治17年の「スウィトン氏英語学新式直訳」でも「限ル処ノ代名詞」とまわりくどい訳をしている。
- (4) 感謝詞 → 間投詞（「英吉利文典字類」は間投詞，歎息詞）
- (5) 所有格 → ほかに「物主格」「持格」の訳あり。（明治4年の「英文典便覧」（青木輔清著）に「物主格」「持格」としている。
- (6) obj. case に「賓格」の訳なし。ただし「賓格」は（英吉利文典字類）以来の訳語。
- (7) pres. → 現在体， fut. → 未来態， fut. perf. → 未来完了態。
- (8) voice → 調， act. voice → 能動調， pass. voice → 「受動態」のほか「受動調」。この時期の斎藤には「態，体，調」の統一的な用法が立てられていない。

右欄の「英華大辞典」については、

- (1) 「及物動詞」「不及物動詞」は、新しい訳語のようで、日本の訳語には見当らぬ。「英吉利文典字類」に「他動詞（移行動詞）」「自動詞（不移行動詞）」とあるものにやや似ている。
- (2) obj. case 「受格」は、Lobscheid の「受座」「英文挙隅」の「主受」を採り入れたものであろう。
- (3) subj. mood の「仮設法，接統法」については、日本での訳語には、明治30年代のはじめ迄に、「附説法」「接統法」「疑問法」「附属法」「疑惑法」などがあり、現行の「假定法」はいつ現われたか。未詳であるが、細江逸記氏の訳語「叙想法」とも関連させて、いずれは出所を明らかにしたい。

12. 冒頭の拙論の目的は、歴史的・段階的に中国における英文法用語訳出の変遷をたどることによって、いちおう果されたものとする。これを要約すれば、19世紀の初頭からその末期にわたる Medhurst, Lobscheid, 「英文挙隅」「馬氏文通」にいたるまでの、中国側における西洋文法（特に英文法）との接触の結果生まれた訳語は、実字，形容辞，嘆息詞，直説的（Medhurst），名字，普通名字，替名字，動字（Lobscheid），動字（英文挙隅），名字，代字，動字，同動助動字（馬氏文通）など、日本の文法訳語に関連があるか、と思わ

れるものが若干見受けられるが、これは中国本来の古典学研究に発したもので、ということができよう。ところが、1900年代に入ると、にわかに日本の近代学術書がおびただしい勢で中国語に翻訳されるに及び、文法訳語も亦日本語から一挙に借用された、と考えることは自然の理であろう。「新著国語文法」「英漢大辞典」「英華大辞典」に示された文法訳語がこの事実をはっきりと証している、といってさしつかえはないと考えられる。

一方、日本の蘭・英学者による西洋文典体系の摂取は、文化年間に(1804-17)にはやくも相当な程度に到達していたと認めることができる¹¹⁾。その所産が例えば安政3年(1856)の「和蘭文典字類」や文久2年(1862)の「英和対訳袖珍辞書」,「英吉利文典字類」に結集しているのである。

ただ注意すべきは S. Wells Williams (スウェーリッシュ・ウィリアムズ) 著「英華韻府歴階」で、これは1844年の出版であるが、この英華字彙部を採って、明治2年に柳沢信大が翻刻した「英華字彙」(*An English and Chinese Vocabulary in the Court Dialect*)に¹²⁾、「冠字 死字 形容字 活字 副字 前置字 接続字 間投字」なる八品詞(pron.がめけている)訳名が見出されることである。しかしほかに、n. 実字(別訳) adv. 語助詞 v. 生字(別訳) future 将来, 将来 past 過了, 過去 ぐらいの文法用語がみとめられるにすぎない。日本語を中国にあって学び、かつマタイ伝および創世記の日本訳を試みた Williams 博士が、前記の訳語を採用した source はどこにあったか、これは興味ある一事実であり、後日再調を期したいと思う。

さて「現代漢語外来詞研究」にも実藤教授前掲論文にも、英文法用語の中国語への借用については、取りあつかわれていないことを知って草したこの小論が、わずかの *raison d'être* でも持ち得ればさいわいである。ただし私にとっては、日本英文法発達史上いづれは逢著せざるを得ない課題であった。

おわりに香港から「最新詳解英華大辞典」をわざわざ取り寄せてくれた中国人留学生香雅懐君のご厚意に謝意を表する。

(昭和42年2月26日記)

付記：本稿は昭和41年度文部省科学研究費による「日本における英学導入史の総合的研究」の分担研究の一部である。

注：① 「英文法訳語の発達—特に八品詞を中心として—」 「言語科学」第2号所収。

② 「英華字典の訳語に与えた英和字典の影響—特に文法用語を中心として—」 日本英学史研究会第2回大会(昭41・6・12 於大野市)で口頭発表。

- ③ 岩崎克己「柴田昌吉伝」昭和10年，一誠堂刊，pp. 46－8．及び古賀十二郎「長崎洋学史」上巻昭和41年，長崎文献社刊，pp.142-6
- ④ 特に，森岡健二「訳語形成期 における ロブソイド英華字典の影響」東京女子大学比較文化紀要第19巻所収，を参照されたい。
- ⑤ 「現代漢語外来詞研究」p. 83によると「史記」が出典で，“程不識，孝景時以数直諫為大中大夫，為人廉，謹于文法”原意は「法律規則之属」とある。
- ⑥ 同書 pp. 79－98.
- ⑦ 中国語学研究会編「中国語研究史」1957年，江南書院刊，p. 141.
- ⑧ 九州大学筑紫文庫所蔵本。
- ⑨ さねとう けいしゅう「中国語のなかの日本語」（「言語生活」昭和41年10月号 p. 55）
- ⑩ 同論文 pp. 54－61.
- ⑪ 注①の拙稿および九州文化史研究所紀要第十二号所収拙論「文化年間における長崎の西洋（蘭・仏・英）文法論」（昭和42年3月）をご参考いただければ幸いです。
- ⑫ 豊田実「日本英学史の研究」昭和38年新訂初版 千城書房刊，pp. 66－8および pp. 497－8.

MODERN JAPANESE WORDS BORROWED INTO CHINESE

—With Special Reference to the Terminology
of English Grammar—

Yoshiharu Ida

When Japan began to introduce the Western ideas and techniques and make translations of them just before and after the Restoration of 1868, she hurriedly and largely borrowed the ready-made words from the English-Chinese dictionary by Medhurst (1847-8) or by Lobscheid (1866-9). But in the second decade of the Meiji era, the scholars of this country devised a good many modern words for themselves from lack of the proper Chinese equivalents for things Western. After the Sino-Japanese War (1894-5) it was China's turn to borrow the modern Japanese

terms thus newly coined.

The infiltration of Japanese elements into the Chinese language seems to be one of the most interesting linguistic phenomena of modern times, viewed from the comparative study of the two cultures and languages. This paper, in the first half, seeks to describe the general trend of such infiltration by giving some examples of the Japanese loanwords in Chinese from the writer's notes. Next his concerns are especially given to the terminology of English grammar; the Japanese equivalents for which are thought to have resulted from our Dutch learning in the Tokugawa period. In the writer's opinion a greater part of those grammatical terms invented here, have been accepted and adopted by the Chinese scholars either through the English-Japanese dictionaries or through the Chinese translations of Japanese textbooks of the field. And in China those borrowed terms have been answering the purpose of explaining not only the system of English grammar but also the structure of the Chinese language.

Such assertion is ascertained by means of the historical survey of the Chinese equivalents compared with the Japanese, for the English grammatical terminology. As key materials are used the following dictionaries and books treating grammar: English-Chinese dictionaries by Medhurst and by Lobscheid, Ying-wên-chü-yü 英文學隅 by Tsêng Chi-tsê 曾紀沢 (1887), Ma-shih-wên-tung 馬氏文通 by Ma Chien-chung 馬建忠 (1898), Hsin-chao Kuo-yü-wên-fa 新著 國語文法 by Li Chin-hsi 黎錦熙 (1924), A Comprehensive English-Chinese Dictionary 綜合英漢大辭典 by Huang Shih-fu 黃士復 and Chiang Tieh 江鉄 (1937), and A New English-Chinese Dictionary 最新註解 英華大辭典 by Cheng Yi-li 鄭

易里 (1962).

The conspicuous transition from traditional Chinese terms to Japanese-made is shown, for the most part, in the form of the list in the second half of this paper.